バンコクおよび周辺都市の歩行者空間
―アジアの歩行者空間に関する研究（その3）―

金友子美・芦川 智・鶴田佳子・高木亜紀子

Pedestrian Spaces in Bangkok and the Surrounding Cities
—Studies on Pedestrian Spaces in Asia (3)—

Tomomi KANEKO, Satoru ASHIKAWA,
Yoshiko TSURUTA and Akiko TAKAGI

Many Thai cities have abundant waterways. This is a report of a survey, conducted in March, 2007, in the Thai capital, Bangkok, and other nearby cities including Amphawa, Samut Songkhram, Damoen Saduak and Lopburi.

Bangkok is defined by branches and canals of the Chao Phraya River which flow through the center of the city. Waterside areas make up small or large community spaces and are used for a variety of daily needs including transportation and fishing. The researchers focus on the waterfront and the unique sidewalk spaces formed there. These spaces vary widely in the ways they are organized, used, and accessed.

Key words: Asian city (アジア都市), pedestrian space (歩行者空間), waterside space (水際空間), community (コミュニティ)

（1）はじめに

19回続いた海外都市広場調査を終了し視点を変えてアジアの歩行者空間に関するシリーズ研究を始めたのは2005年のことである。しかし、海外都市広場調査の段階でアジアを対象として調査した回もあるので実質はもっと早い段階でアジア調査に着手している。今までに訪れたアジア諸国は、1992年のトルコを皮切りに中国、台湾、インドネシア、インド、ネパール、トルコ、イエメン等、今回の一帯と日本を含めれば9カ国となる。

都市の広場と都市の歩行者空間とは関連性のある対象である。つまり広場空間とは歩行者空間に内包される概念である。ヨーロッパで都市広場を追ってきた経験をもとに広場より広い概念で再度調査を試みるということが本研究のひとつのお意味である。もうひとつは日本を含むアジアにはヨーロッパのような広場概念がないといわれていることにより、より広い概念の歩行者空間を研究の対象としたわけである。今までにアジアで行った調査から、広場とは異なる空間でありながら広場的な空間がアジアを対象として各種あることがわかってきている。同時にヨーロッパの歩行者空間を広場だけで捉えるのは不十分であることもわかってきている。とえれば路地空間である。アジア特に日本では路地空間の多様な姿は現在でも良好な環境として紹介されているし、逆にヨーロッパでも路地空間が活きている事例は存在している。その意味で方向は間違っていなかったのではいかんかと思われる。

さて、「アジアの歩行者空間に関する研究（その1）」（昭和女子大学学術798号）の報告で9個の概念的な歩行者空間の概念を挙げているが、今回の調査は9個の内の第1の概念に属する水際線とその周辺の歩行者空間を主な対象にタイのバンコクを調査地として設定した。

タイは4本の大河によって位置づけられている。チャオプラヤー川、メークローン川、ターチーン川とパーンコーン川であるが、この自然に流れれる川とそれらをつなぎ開削された多数の運河の空間が河口地帯に広がるバンコクの生活空間を構成しているといえる。これは豊かな水環境であるが、歴史的には豊富であるが故に苦渋を強いられた水環境でもあった。生活空間の形成と歩行者空間の形成のつくり方、水に対する両面性で見てみると思い立ったのが本調査のきっかけである。
なお本稿では前半は調査概要及び対象空間の紹介を行い、後半においてはそれらの調査事例のなかからこの地域の特徴である水辺の歩行者空間に着目し検証した結果を述べ、さらには歩行者空間の類型化を試みている。

（２） 調査概要

① 調査対象国：タイ
② 実施期間：2007年3月14日（水）～20日（火）
③ 調査メンバー（所属等は調査実施時のものである）
芦川智（昭和女子大学生活環境科学研究所教授：調査責任者）
金子友美（昭和女子大学生活環境科学講師：調査スタッフ）
鶴田佳子（昭和女子大学現代教養学科講師：調査スタッフ）
髙木亜紀子（昭和女子大学生活環境科学助教：調査スタッフ）
田中凉子
（昭和女子大学大学院生活環境科学研究科1年：調査スタッフ）
守田あゆみ（昭和女子大学生活環境科学3年：調査スタッフ）
元吉麻衣佳（昭和女子大学生活環境科学3年：調査スタッフ）
塚越克子（昭和女子大学生活環境科学3年：調査スタッフ）
山田あすか（昭和女子大学生活環境科学3年：調査スタッフ）
入之內瑛
（都市横浜工房主宰、元昭和女子大学非常勤講師：調査協力者）

④ 調査日程と調査行程
1. 3月14日（水）Tokyo→Bangkok
2. 3月15日（木）Bangkok
3. 3月16日（金）Bangkok
4. 3月17日（土）Bangkok→Amphawa
   →Samut Songkhram→Amphawa
5. 3月18日（日）Amphawa→Damnoen Saduak→Bangkok
6. 3月19日（月）Bangkok→Lopburi→Ayutthaya
   →Bangkok
7. 3月20日（火）Bangkok→
8. 3月21日（水）→Tokyo

（3）調査実施状況と都市の歩行者空間の概要

次に示すのは各調査地の歩行者空間の概要をまとめたものである。本文中で用いている歩行者空間および住居等に関する言葉のリストを以下に記す。

サバーン 木製の細い板状通路
サーラー 住民が共用して使用する船着場の小屋。個人で所有する場合もある。
ター そば、船着場
ベー 筏、筏に付けて浮く、水に浮く
チャーン タイの伝統的建物の前に配置される屋外空間。屋根のないものをノーク・チャー

（1）バンコクの都市の歩行者空間事例

バンコクはタイの首都であり、50の区からなる国内第一の都市である。調査範囲は、中央部を流れるチャオプラヤー川とその西側バンコク・ヤイ運河（以下、ヤイ運河とする）を中心としたトンブリー地区周辺、またチャオプラヤー川東岸玉置周辺の歴史的地区、さらにその東側の市街地におよんだ。これらの地区の水辺の空間、宗教施設周辺、市場、住宅等について調査を行った結果を以下に報告する。
i）ヤイ運河河口の町

チャオプラ PARAMETERSからヤイ運河に入ると、水門があり船の進入を規制している。水門の手前左側に小さな集落と船着場があり、人々が利用している。水辺に面した住居群の一角にブームさん宅がある。ブームさんは奥さんと水を売って生活している。この集落は30世帯が暮らしており、元々は隣接しているワット・カラヤーナミット（寺院）敷地内だが、昔から住んでいるため居住が許されているという。

船着場から南東へ住宅地を通って進むと、ワット・カラヤーナミットがあり、小学校も隣接している。寺院の前面は広場となっている。その奥を南東へさらに進むと商店街がある。規模は小さく、日用品や食料品を売っているが、この周辺の人々にとっては利用度が高く重要視されている。商店街には大きな菩提樹と祠がある。

商店街をさらに進むと、沿地に建安宮の小さな門が現れる。そのまま住宅の路地を通ると広場があり、建安宮がチャオプラ Parameters川に面して建っている。船着場もあり、そこから川に沿って新しく造られたコンクリートの遊歩道が続く。川沿いの住居は水が一定量以上浸出してこないよう、石堤で囲っている。遊歩道からサバーンを渡り住宅地に入ると、中央に祠のある小広場がある。ここはテーブルや椅子が置かれており、洗濯や皿洗いをする場になっていて生活の一部の場所である。また、サバーンは洗濯物を干したり、魚などの干物を作ったりする場でもある。木造の住宅は古く、傾いているものもある。
チャオプラヤー川より南に進むと、水上の家はなくなり、コンクリートの歩道が続く住宅地に入る。住居もコンクリート造のものだらが続き、川沿いの住居よりも高級感がある。場所その中に家や店舗とテナントなどが並んでいる。さらに住宅地を南東へ進むと広場が現れ、サントカルクス教会が建っている。教会の建物はチャオプラヤー川に正面を向け建設されており、船着場も付加されている。さらに川沿いにコンクリート製の道路が続く。船着場の階段では、川の水で鍋を洗っている人の姿が見られた。

写真9 サントカルクス教会の正面と広場。写真10 川沿いのコンクリート製の遊歩道と民家。

この事例は対象空間のほとんどについて車の進人が不可能な幅員のため自動的に歩行者空間となっているのである。つまり細部空間の事例である。車の進人が必要な場合はこの細部空間に直交する道路で対応することが必要となる。いずれにせよ、歩行者専用空間として人にとって優しい素朴な空間のしつらえがなされていることが観察された。

ii）モスクのある町

チャオプラヤー川をはさんで王宮の対岸にトンブリー区がある。ここは、1976年ターセン王によってトンブリー王朝の首都が建設された地である。15年後にターセンが退位され、ラーマ1世がチャオプラヤー川対岸に遷都すると、トンブリーはひとつ息となった。その後1972年バンコクに収縮され、現在はバンコクの行政区のひとつである。現在ではこの行政区だけでなく、チャオプラヤー川の東岸部一帯をトンブリーと呼ぶことも多い。

このトンブリーにはムスリム、キリスト教徒、中国人、タイ人がそれぞれ不動な宗教施設を核として地区を形成している。そうした宗教施設である教会や寺院は、建物の軸を水路と垂直にとり、建物ファサードを川や水路に向けている（サントカルクス教会、建安宮、ウッド・カラヤーナミット参照）。

写真11 モスク西側のファサードと庭園。写真12 モスク入口の空間。水場がある。

ワット・カラヤーナミットの南方、ヤイ運河近く、細い路地の入り組んだエリアの中にBang Luangモスクがある。Bang Luangとは水路の名前であり、モスクはこの水路の士手部分に位置する。このモスクは通常タイの人家には、白い建物を意味するKudi Khaoという名称で呼ばれている。モスクの建物は約22m×12mの長方形で、中心に礼拝施設があり、四方は屋根がすらりと吹きさらしの空間となっている。入口のある東側には水場が設けられ、食器やベンチが置かれていた。モスクは広場の中に配置され、周辺は一帯することができる。広場には2～3階建ての民家が並び、一部は店舗やレストランとなっている建物もある。広場にはこうした商業施設の商品がパラソルの下に並べられていたり、洗濯物が干されていたりする。鉄筋の植物や、パイク、籠など、広場にあふれ出た各家の領域と広場空間の境界は曖昧である。またモスク東隣にはテント風の屋根が架けられた吹きさらしの空間があり、男性たちはくつろぎ姿が見られた。この大屋根の下には、ステージの部分や展示板があり、人々の集会・コミュニティ空間となっていることがわかった。

これらを整理すると、東西の軸に沿ってモスク→人々の
バンコクの中心部の西方、ヤイ運動から少し入ったところにパンウェイク寺院がある。ヤイ運動から支流に入ると、黄色い三角屋根のパンウェイク寺院が正面に見える。本堂が運動からの軸線を意識して配置されていることがわかる。周辺は1〜2階建ての木造民家が並ぶ環境である。

パンウェイク寺院の内側は2mほどの中引き壁で囲まれ、本堂の他に礼拝堂や鍾楼、寄宿などいくつかの建築物が点在するが、本堂の正面前よりヤイ運動側は広場となっている。

夏の雨季に、寺院の敷地をぐるりと囲む通りに遊歩道が形成されている。ここに展示されている品物は、果物や魚、肉といったコミュニティ空間→墓地という空間配置と、モスクを中心として同心円状に公的空間→私的空间という段階的空間構成がなされていることがわかる。前述のようにこの地区の他の宗教施設が水を意識した空間配置をもつにに対して、モスクの向きと配置が空間構成の要因となっていることは特徴的である。

![写真13 モスク側の玄関・コミュニティ空間。](image13)

![写真14 広場空間。左側がモスク、右側レストランがある。](image14)

![写真15 広場にあふれている商店。](image15)

![写真16 レストランの前には洗濯物が干してある。](image16)

![写真17 ヤイ運動の正面。](image17)

![写真18 パンウェイク寺院付近。水路沿いの民家。](image18)

![写真19 寺院の敷地は壁で囲まれている。](image19)

![写真20 パンウェイク寺院の本堂。前面は広場になっている。](image20)
た生鮮食料品から、雑貨、生花、菓子と多彩である。いずれの店舗も深い軒をもち、通りに対して天幕を張り立ててその下に商品を並べていた。

また寺院の正面、軸線上には市場があり、柱と屋根が架けられただけで開放的な空間に商品が多数並べられていた。以前はこの近くに船着場があったが現在は使われていない。

写真 21 寺院の東側を示す場面沿っての舟の運河と商店
写真 22 通りには天幕が張られて

写真 23 市場は開放的な空間となっている。

この通りの幅は約2mほどであるが、各店舗から商品があふれ出ているため実際歩行者が通行できる空間はそれより狭く感じられる。そしてときおりバイクも通り抜ける。こうしたバイクは店舗の間に設けられた狭い橋を渡って対岸からやってくる場合もあり、突然目の前に現れる。歩車分離がなされていない状態であるが、店舗からあふれる商品や深い軒、天幕といった空間を構成する要素が通りと店舗空間を一体化させている。また、通りが大きくカーブしていることにより、次々と異なる風景が連続して現れてくるシーケンス効果も加わり、魅力的な步行者空間を創り出している。

写真 24 市場で魚を売る女性。

写真 25 店舗の間の対岸と橋の橋が架けられている。
写真 26 通りは寺院の敷地に沿って緩やかにカーブしている。

あるがベンチや椅子、テーブル、植栽が置いてあったり、洗濯物が干してあったりと個人の空間としても使われていた。建物の屋根とは別に、通路には庇が架けられている。

拓き当たりの家は、引越し資金をもらい 2007 年末には引越しをし、博物館になる予定である。周辺の民家や商業施設は昔の市場問屋が改修され、博物館の周辺では水上マーケットも行われる予定である。

ヤイ運河にかかる橋はナーンソンプン橋という名前がついており、非常に勾配がきつく幅が狭いが原付バイクも通っていた。船着場の前庭としての広場に面する寺はアユタヤ時代からワット・サレと呼ばれた王室の僧院である。後にワット・クハサワンという名前に変えられた。

マンゴーの船着場周辺図

マンゴーの船着場自体は車のアプローチが可能な寺院前の広場となっている。しかし、この広場からのびる商店街は、水辺空間と陸地の接触する空間に位置しており、車の入らない空間となっている。というより現実的に幅員の上でも木造床組でできている商店街の構造上進入できない形態となっている。ただこの商店街の中央部分で交差する通り空間は地上とコンクリート橋によってできているので車の進入は可能であるがその幅員と橋の勾配の状況からしてバイク程度に限られている。

写真 27 運河橋から見た商店街
写真 28 ター・ベンで売られている野菜。
この船着場の名称ター・チャン（Tha Chang）とは象の船着場を意味する。かつてこの船着場に象が水浴びをしに来ていたことからこの名がついた。正式名称は、19世紀初頭にラーマ1世がプッダ像をこの船着場から運んだことからプッダ像の船着場ゲート（Pratu Tha Phra）というのだが人々はよくでター・チャンと呼んでいる。この船着場は毎日営業しており、営業時間は5時から21時である。6時から7時頃が最も人出が多い。夕方に広場の飲食店が増えようだ。

船着場への車でアプローチしたとしても最後は歩行して乗船しなければならない。この船着場の場合は付属して広場がありそれには道路部分があるが、露店や飲食屋台が増えると車の進入は事実上不可能となる。しかもリーラ・ワッディの並んだ広場部分は船着場を利用する人々の重要な憩いの空間となっているので完全に歩行者のための空間となっている。つまり、広場と船着場施設の組み合わせにより時間によっては完全に歩行者空間として機能している。
vi) パーク・クローム市場

パーク・クローム市場は花や野菜などを扱う24時間営業の青物市場である。チャオプラヤー川にかかるラーマ1世橋の北西のたもとに位置する。王宮のある中心部からはロー通りを挟んで南東に位置し、北東にはバフラート市場が続く。市場組合の話では、登録している店舗数は4000軒、毎月賞料を支払っているとのことである。パーク・クローム市場は大きく、国営と私営のエリアに分かれている。通りに面する店舗と施設内の店舗に面する店舗で、賃料が異なっている。取り扱い商品は、チャオプラヤー川沿いの半屋外の大空間は、野菜等の生鮮品の卸市場となっている。市場は川沿いから北側内陸部に入ると大きく3ブロック、次に大通りを挟んでブロックが小さくなりながら10ブロックに分かれる。大通りに面する店舗の多くは花を扱しており、大通り北側では野菜、果物、果子などの食材が中心となる。市場は基本的に24時間営業であり、一般の客も購入できるが、早朝は業者が買い付けに来て、賑わうようである。市場の一角に祠があり、ラーマ1世の像が祀られている。今後の都市計画で水辺が再開発される可能性もあり、公園の計画図がまとめられていた。ロー通り沿いには保存建築物も並ぶ。

市場施設のため物資の搬入、積み出しには車が不可欠であり、食材を買い付けに来る業者も車に依っている。そのため1日中車と人であふれているのが現状である。市場周辺には若干広い道路部分があるだけで市場のための駐車場はない。そのため歩行者が進入することは想定していない空間であるが、建物施設内は基本的に歩行者空間として機能している。

vii) サンベン（ハン橋周辺）

サンベンはバンコク最大の商業地である。チャオプラヤー川に架かるバンランブー・オンアン水路の東側に位置し、チャオプラヤー川の北側に並行する形で広がる。サンベンレーン（通り）、ハン橋、ヤラワート通り、チャルンクル通り、チャイナタウン、屋根の付いた通りと店の窓が両サイドから張り出している通り、大空間の旧市場と様々な形態がある。ハン橋を挟んで西側がインド人の多いバフラート市場で、布地を扱っている店が多い。東側のチャイナタウン、ハン橋周辺は布地関係が多く、雑貨、食品、様々なものが所狭しと並び、食堂や屋台も狭い中に店舗をしている。
この商店街通りは両側の商店からの商品のはみ出しや露店で賑わっていて、商店の営業時間は人々であふれている。しかし商店の営業時間外は普通の街路空間に戻り、車も人もアプローチできる空間である。ただこれに密接な関係が深い街路であるため、歩行者分離は難しい状況である。つまり、街路の持つ機能によって歩行者専用の空間となる特性を有していると言える。

図-12 パーク市場周辺図
営業エリアは土日の8時から18時、露店は朝4時から営業している。店舗数は8827店舗。仏壇2525年（西暦1982年）1月2日に開設し、25年の歴史がある。9時半からは、敷地内の無料バスが運行している。店舗の大きさは1ブース2×2.5m、ほとんど店舗は1ブース、動物売り場などでは4ブース使用している。水曜と土曜はゲート1から延びる通りでフワーマーケットが開催され823の露店が出る。国営エリアのほか中央には1976年に建てられた時計塔があり、待ち合わせ場所としても利用されている。時計塔のある通りの西側で、土日にスペシャルマーケット、毎月最終日曜にはオークションが開催される。店舗数はとともに252店舗、テント数は520である。市民エリアは平日10時から17時、土日は9時から19時まで営業している。店舗数は630店舗。（店舗数は調査時のものである。）出店数からかなり大規模な形のマーケットである。歩行者空間としては大屋根の架かった建物施設の中央部に中庭的に屋外空間を取り込んでいる。そこに時計塔を配置してこのマーケットのランドマークとしている。

写真46 施設内の様子。写真46 ランドマークとなってい
る時計塔と建物。

ע）スアンルム・ナイトマーケット

スアンルム・ナイトマーケットはラマ4世通りとウィッタユ通りの交差点に位置し、ウィッタユ通りを挟んだ東側にはルンビ公園がある。地下鉄のルンビ公園駅を出ると目の前に入ってきた。2001年オープンした3700店舗という、バンコク最大規模のナイトマーケットである。午後3時から深夜まで営業しており、土産物、衣類、アクセサリー、果物、CD、手工芸品、絵画や彫刻などの美術品が売られている。場内西側には巨大なフードコートがあり、各国の食べ物露店がずらりと並んでいる。前方にはステージがあり、生演奏やダンスショーなどが行われる。また、東北にはコンサートなどが開催されるベック・テロ・ホール、中央部にはタイ伝統の人形劇を毎晩上演しているジョイ・ルイス劇場がある。2006年5月には、ラ・ルー・デ・バリという観覧車ができ、ナイトマーケットのシンボル的存在となっている。この近くにインフォメーションがあり、施設の案内図が入手でき、マーケットの中心として待ち合わせ場所等に活用されている。

写真47 観覧車とインフォメーションの夜景。
写真48 施設内部の様子。

スアンルム・ナイトマーケットの場合は当然のことながら、城内の車道及び駐車場の一部と歩行者空間を明確に区分している。ただし市場が営業している時間では車道部分は歩行者空間であるが歩行者優先案内となっており、車と歩行者の共存空間である。それ以外の時間は搬入搬出のために車道は機能しており、車優先の空間となっている。もちろん市場利用者が車でアプローチする場合の駐車場は市場周辺に確保されている。

②アンバパの水上マーケット

アンバパはバンコクの西南方70km、メークローン川下流に位置している。大小様々な水路が縦横に走り、水路が発達している場所で、この地域に暮らす人々にとっては川や水路は生活に欠かせない存在である。メークローン川から引き込まれる水路の両岸に、1kmに亘って店舗や住宅が建ち並び、水路の先にはワット・パバヤートというタイ寺院がある。水上マーケットは50〜60年前から行われていたが、地元住民のためのもので観光客向けに開かれていたわけではなかった。川沿いの店舗は車の普及に従い徐々に姿を消していた。元々、常見物の名所として外国人人に人
気の場所であるが、タイ人観光客を呼ぶために３年前の8月11日から4日間王妃の祭り（母の日）が行われた。橋を挟んだ両岸のAmphawanawit RoadとLeamnatee Roadにはバラソルの露店が立ち並び、水上マーケットも開かれていた。その祭りが習慣化され、現在は例により毎週金曜から日曜の16時から21時に市が開かれ観光客で賑わっている。川沿いや通りの店舗・露店約300店、舟約40舟が葉子や果物、歩きながら食べられる鶏食、土産物を販売している。橋のたもとは大屋根が架かった市場施設があり、毎日夜市が行われている。周辺2km圏内に住む住民たちが売買に訪れる。

タイの水上マーケットの特性として水上の舟に積んだ商品を購入する形態か、水上の舟に客が乗り船上に用意された店舗の商品を購入する形態とがあるが、アンファーの水上マーケットの場合は前者の形態である。東方に水よ、水上と地元の住民を利用した歩行者空間の形態である。そして水面の干満による上下に対応するための装置として階段を活用している。

③meerクローン駅と線路のマーケット
meerクローン駅の近くでサムットソワンクライは、バンコクから南西に約60kmの位置にある。この地域は長い歴史を持つ、18世紀のトランジク王朝時代には戦時中の要塞都市としてビルマ軍を撃退したことで知られている。
meerクローン駅とバンコクワンジェイ駅間には国営鉄道が走り、線路沿いには、細い通路を挟んで市場と線路間の露店からなるユニークなマーケットが広がっている。

写真63 線路上に並べられた果物と線路上を行き交う人々。
写真64 線路は店舗のすぐ脇を通る。一部の商品は線路上に置いたままである。
露店では主に果物や魚、野菜などが売られている。線路上にまで商品が並べられていて、列車が通る際に数十秒で片づけをし、通過後すぐに営業を再開する。列車の車体に当たる心配のない魚などは大胆に置いたままである。市場の方では、露店と同様な生鮮食品のほか、ビニール袋に入れられた加工食品や玩具なども売られている。

1日に4本の列車しか通らないためにこの形態が生まれた。きわめて特異な形の歩行者空間である。歩行者は線路の間を歩くことになる。

4 ダムヌン・サドゥアクの水上マーケット
色とりどりの果物と野菜を満載にした木製の小舟を青色のシャツと大きなつぼの草薙帽子を身につけたタイの女性が持ちいている。そんな光景は20年以上前のことである。現在は、7年前から観光客が大幅に増えている。水上マーケットは日曜から月曜まで、毎朝早くから13時まで営業している。連日、多くの観光客で賑わっており、日曜はタイ人も多く訪れる。

大屋根の架かった市場施設はコンクリートで整備され、水位の変化に対応できるよう水辺に向かって階段状になっている。施設には外国人向けの土産物や果物が売られていって屋台のような小さな食堂も併設されていた。水上は観光客を乗せた舟でひしめきあっている。両岸にある露店では主に工芸品や民芸品などの土産物が販売され、中にはブランド製品を販売している露店もあり。木製の小舟の上では料理（海鮮・豚）や焼き蕎麦、ココナッツのジュース、カットフルーツが販売されていた。料理や稲荷は舟の上で調理し、販売している。料理や稲荷は観光客だけでなく市場で商売をする人も買っていた。
水上マーケットを北上するとダムヌン・サドゥアック運河がある。ダムヌン・サドゥアック運河はメークローン川とターチーン川を結ぶため、ラーマ4世が1860年に開削した運河で、長さは36 kmに及んでいる。川沿いは住居が並び、水浴を楽しむ居住者の姿などのんびりとした風景が続いている。住居の前には運河と平行にコンクリート造のターベーがのび、各住居に木製のバンダイが運河に向かって設けられている。

ダムヌン・サドゥアックの水上マーケットは客が舟に乗る水辺の商店をまわる形態を主としているが、商品を積んだ舟に客の舟が横付けして購入する形態も見られる。水上マーケットの形としては複合形といえる。この地区のセンター部分すなわち航路の空間はかなり大規模に施設化されており、階段を利用した歩行者専用空間を形成している。

写真57 中心部の施設と水辺の空間。
写真58 舟に乗って土産物屋をまわり観光客。
写真59 ダムヌン・サドゥアック運河沿いの家。各家にバンダイが設けられている。
写真60 家の前の運河で水遊びをする子どもたち。

⑥ロッピーの民家
ロッピーはバンコクの北153 kmの所に位置し、先史時代の長い歴史を持つ古い町で、現在の人口は約54,000人である。ロッピーがタイの歴史に重要な役割を持つようになったのはアユタヤ時代の大王、ナライがこの町を第2の都とし、年に8〜9ヶ月をここで過ごしたからである。ロッピーの最も栄えた時代であった。

ロッピーの町は、南北に流れるロッピー川の両岸に形成され東側には季節ごとの水位に対応できる傾斜を持つ高い土地がある。ここには市場が形成され様々なものが売られているが、これはこの地がロッピー川とその支流の合流点であることにも起因している。街の南側には城壁が残りかつては城砦都市だったことがわかる。現在では野生の猿が多く生息し、猿の町として知られている。
ⅰ）ガッちゃんち
数軒の家がサバーンによって繋がって建てられている。そのうちの1軒の家が「ガッちゃんち」である。この家には49歳の女性と娘3人、それぞれの配偶者と孫娘の8人が暮らしている。孫娘の名はガツ（1歳9カ月）。娘夫婦の1組（ガツの両親）はコンピュータ部品の会社ミニベーに勤めている。昼間は祖母にあたるこの女性がガッちゃんの世話をしている。残る2組の夫婦は輸出用シーフードの会社に勤めている。女性の父親は調査時に家に来ていたが、別の家で暮らしている。この家は賃貸で、月1000バーツで借りて暮らしている。ガスはプロパンガス、飲水はカレーに塩水を用いて使用している。一度に大勢で入ると家が壊れる可能性があるということで、数名の中に入る実測調査を行った。内部には3寝室があり、家具類は充実している。

写真61 入口のサバーン
写真62 ガッちゃんち内部

図-22 ガッちゃんち地図

図-23 ガッちゃんち平面図

図-24 村長さんの家平面図

図-25 村長さんの家北図

写真63 村長さんの家の外観
写真64 村長さんの家の内部

ⅱ）村長さんの家
人口およそ600人（71世帯）の村の村長さんの家である。子どもが3人（女2、男1）いるが結婚して独立し、現在は夫婦2人で暮らしている。1階は倉庫とトイレになっており、主に2階で過ごしている。階段を上がるとラビアンにテーブルと椅子があり、脇には小さな食器棚があった。料理はあまりしないようである。この建物には、以前、副県知事が住んでいたが、現在の村長が50年前にこの地に移住した時、土地と家を20万バーツで買収している。建物自体は100年以上前のものである。

ⅲ）川の浮家
この川から上の市場（後述）に向かって緩やかな上り斜面になっている。以前は岸着場として市場の品物を運んでいたようだが、現在は使われておらず、調査時は子ども達が遊びをしていた。川に浮かんでいるこの浮家はそれぞれ番地を持っており、電気、水道も整備されている。雨期には川の一番上まで水が来てしまうため、休憩所も水に浸かってしまう。その時は、浮家はレーパで結び付け固定している。また浮家が壊れると、そのたびにつくり直しなが
のものをとりあげたが、いずれの都市においても水辺環境との関係に特徴があった。これは今回の調査地域がチャオプラヤー川河口のデルタ地帯に位置することによるものである。首都バンコクにおいては、チャオプラヤー川と運河・水路が都市生活に重要な意味をもち、歴史的にも市民生活と大きく関わってきた。船着場・宗教施設・市場空間・住居、現在においてもこれらが水の環境と関わりながら機能していることを今回の調査で確認することができた。また一方で、バンコク周辺の小都市においては水上マーケットや浮家集落など、都市部では失われた素朴な水辺との関わり方を観察することができた。

本稿においては、こうした水辺と都市空間の関係に着目し、その空間形を整理する。

①水辺の接触領域の歩行者空間

バンコクおよびその周辺は、サバナ気候あるいは熱帯モンスーン気候に区分される。これらの気候は雨期・乾期の別があり、水辺における水位の変化が激しい。チャオプラヤー川下流のアンパーでは、毎日2m余りも水位が変化する。こうした水位の変化に対応するか、それが水辺と歩行者空間の接触領域としてどのような空間を形成しているかを整理する。

i）基本形

水辺の基本形は、水面に対してほぼ垂直に護岸がつくられている形である。ある程度の高さを確保しており、水位の変化に対応できるが、水辺を積極的に利用する形とは言い難い。

ii）階段（バンダイ）

水每逢する階段または端子状の装置を設けているものである。水位の変化に応じて、使用する高さが異なる。市民生活においては、洗濯や炊事などの生活用水として水を使用するための空間として使用されている。また水上マーケットにおいては、水位の変化にかかわらず商業活動が可能な空間となっている。いずれも水辺へアプローチするための装置であるが、単なる移動のための空間ではなく、水辺に人が近づきそこにある時間滞在することを可能にして
写真 71  階段状の空間と水上マー
ケット。
写真 72  個人の家に直結するパン
ダイで作業をする人。

いる空間である。

 iii）水上住居（ルアン・ベー）
水位の変化が大きい地域では、水上に家がつくられてい
るものがあった。これらの家はサバーンと呼ばれる細い
連路でつながっており、簡素な作りのものが多い。水辺
に杭を打ち、高床式の構造をもつものと、水面に浮かぶ浮
家形式のものがあった。前者はアプローチするためのサバ
ーンは住居と同様に杭上に設置されているが、後者の浮家
ではアプローチの通路自体も水面に浮かんでおり、不安定
である。しかし逆に考えれば、この水面に浮かぶという方
法は、水位の変化に対して最も柔軟に対応するための装置
であるといえよう。

写真 73 高床式の住居。杭を打ち
て支持している。
写真 74 浮家。水面の上下に連動
する。

写真 75 水が引いている時の高床
式の住居。

図-28 水上住居断面図

 iv）通路（サバーン、ター・ベー）
前述の水上住居に見られたサバーンは、幅の狭い板を渡
した形で簡素な作りのものが多かった。これらは各住居
へのアプローチのための装置であって、機能的には通路で
しかない。一方水際の空間に設けられた通路で、少し幅の
広いものは、通行のためだけの空間ではなく、人々の生活
空間の一部であったり、コミュニティの場であったり、他
の機能を兼ね備えた空間となる場合がある。

長屋形式の住居の水辺に沿って設けられた幅の広い通路
ター・ベーには、緑が置かれ、鉢植えの植物や洗濯物で
あふれている。農具や家財道具が置かれている場合もある
る。暑さの厳しいこの地において、通路は水辺の涼をとれ
る空間であり、家空間の一部である。

また同時にター・ベーは公的な空間としての機能もある。
観光地や船着場の近くでは、通路面を商店街が形成さ
れその軒下は一般に開放され、通路と商店が一体化して機能
している。通路側に商品が並べられる場合もある。この
場合の通路空間は、家々の一部であるから、商業活動の
場として機能し、不特定多数の人を受け入れる空間である。

近年はコンクリートで形成される通路もあるが、単にコ
ンクリートの板だけのものから遊歩道として整備されてい
るものが、その形体は様々である。

これらの通路空間には、所々に船着場が設けられ、水上
からのアプローチが可能になっている。また住居毎にパン
ダイが設置されている場合もある。都市において水路や河
川は風の通り道となる。それらに沿って設けられた通路空
間は厳しい気候を緩和してくれる人々の憩いの空間でもあ
る。

図-29 ター・ベー断面図。左図は商店街などに見られる端壁付きの
通路、右図は住居前に見られるパンダイ付きのもの。

写真 76 ター・ベーに並べられた
野菜。
写真 77 ター・ベーは人々の憩い
の空間でもある。

 v）船着場（ター、サーラー）
水路とは文字通り水の路であり、人々は舟によって行き
来する。そして水路から陸上にアプローチする際、上陸す
るための装置・空間が必要である。船着場はそうした、い
わば水から陸への玄関にあたる空間である。観光船などあ
る程度の規模の船の着着が可能な船着場から、個人の住宅
に付随するものまで規模は様々である。特徴的なのは、待合いスペースを含む施設化された船着場で、四方を囲み開放の空間にベンチャーや公衆電話が設置されているものもある。また洗濯場を兼ねているものもあり、人々のコミュニティの場となっている。

アンバローの水上マーケットでは、川に沿った歩道ターピーの所々に設けられたバンダイ付近でこうした商業活動が盛んに行われていた。バンダイは階段状の空間であることから、水位の変化に対応するだけでなく人々が壁掛けられる空間があり、水辺における人々の滞在空間である。またターピー自体にも椅子やテーブルが置かれている場合もある。陸上の店舗の一部として使われていることもあり、水辺に向かって設置された座席もあり、舟上の売り手と直接やりとりが可能な空間となっている。

ダムヌン・サドゥアクでは、中心部の施設化された市場付近でこのタイプの商業活動が見られた。市場にはコンクリート製のベンチが設けられ、トロピカルフルーツを中心とした果物や麦類・スナックなどの食品を売る船が集っていた。ただしその市場施設側にも食品や土産物を売る店舗を併べており、水際空間は陸上と水辺で売り手と買い手が互いに交流する空間でもあった。また水面と陸上の高低差の大きい場所では、舟から船を組んだ足場に乗って買い手とやりとりをする姿もあった。

②水の道と水上マーケット

今回の調査地がチャオプラヤー川河口のデルタ地帯に位置し、そこで暮らす人々の生活に水が必要な役割を担ってきたことはこれまでに述べてきた。都市において河川や水路は、その上には倉庫がつながれないオープンスペースのひとつととらえても、人々は古くから「水の道」として水運を利用してきたのである。そうした「水の道」は、単なる物資や人の輸送路ではない、そこで人と人との交流がうまれる商業活動の場としても使われてきた。現在では観光用のものが有名になってきたタイの水上マーケットだが、元々はこうした「水の道」に誕生した市民のための商業空間であった。

現在の水上マーケットの商品売買の形態には大きく2つの種類があることは、すでに前掲で紹介した。ひとつは商品を載せた船が河川や水路を航行し、買い手は舟でそれぞれの船に向かってするのを待っているタイプであり、他方は買い手が舟に乗って移動し、川や水路に沿って設置された店舗から商品を購入するものである。

今回の調査で訪れた水上マーケットは2カ所の事例であるが、これらの商業形態の相違と水辺空間の形を整理してみる。

ⅰ）商品が舟で移動する

売り手側が商品を舟にのせ移動し、岸に舟を近づけ陸上のいる買い手との間で商業活動を行う形である。

ⅱ）人が舟で移動する

このタイプは河川や水路を「水の道」ともといえば、その水際に沿って店舗が建ち並び、人々が商店街を訪れる移動手段として舟を利用する形である。

ダムヌン・サドゥアクの訪れる観光客のほとんどは、観光用の小舟に乗って、水上からのショッピングを楽しむ。舟に乗る中心部を少し離れるように、沿岸に土産物を売る簡易な小屋が建ち並ぶエリアになる。強い日差しを避けるように小さく張り出した庇の下には、所狭しと商品が並べられ、観光客に乗せたがる水辺が始まる。観光船の足下は高床になっており、水位の変化に対応可能になっている。

水際にはバンダイなどの屋根はないが、観光客が利用する
のは小舟であることから、商品のすぐ近くまで近づくことができる。護岸は特に整備された様子もなく、自然のままであり、陸側に歩行者空間はない。水上からやってくる買い物だっだけに続く空間である。

またダムノ・サドゥアクでは、商品側も舟で移動していることから、舟と舟の間でも商業活動が行われる。舟で遊覧中の観光客が、のどの渇きを癒すためココナッツを購入していた。

写真 85 船上の卸された土産物屋。
写真 86 観光客は小舟で水路を移動する。

写真 87 船下で売るココナッツ。
写真 88 護岸は整備されていない。自然のままである。

図-31 ダムノ・サドゥアクの水路断面図

のアメニティを与えてくれる空間でもある。気候風土を活かしたその土地ならではの観光資源として、今後経済効果も期待できる空間である。

(5) 歩行者空間の類型化

歩行者空間の類型化をめぐって、「アジアの歩行者空間に関する研究（その1）」（昭和女子大学学間785号）でその可能性となる空間を9事例に対応して整理した。そして「アジアの歩行者空間に関する研究（その2）」（昭和女子大学学間801号）では段階空間を対象としているが、空間軸と人間軸によって歩行者空間の概念規定モデルを導入して尺度化を行った。さらに、「歩行者空間の類型化～アジア諸都市をケーススタディとして～」（昭和女子大学大学院生活機構研究科学要 Vol.17）では歩行者空間の概念規定モデルの2つの軸である空間軸と人間軸についてその導入の妥当性を確かめるために、100の事例を元にした多変量解析による検証を行い、軸の妥当性を確かめた。

図-32 歩行者空間の概念規定モデル

今回の報告は2軸9類型として規定された歩行者空間の概念規定モデルにより、バンコクおよび周辺都市の水辺を中心とした歩行者空間について適用を行い、その類型化に対する表現力を確かめ、歩行者空間の概念規定モデルの記述性能を確認していく。

今回の14調査事例を歩行者空間の概念規定モデルに適用した結果が次の表に示される。14の事例を概観してみたときに今回の調査事例の特徴を整理すると以下のようになる。
①細街路空間を基本とするコミュニティ空間の構成を主とする事例：ロップリーのガッチャんち

この事例は、ロップリーの住宅街である。街の中心部には、複数の商店が並んでいる。商店街は、住宅街と一体となっている。

②細街路空間を基本としながら商務街のようなある程度拡大する存在をもつとしてある事例：サンペ、ポーベ市、メキコローン駅と線路のマーケット

この事例は、サンペの市街地である。市街地は、住宅街のように狭いが、ショッピングモールや、飲食店が混在している。

③細街路空間が主であるが、核となる寺院やモスクや広場と複合している事例：ヤイ運河町、モスクのある町、寺院のある町、ショッピングモールと商務街

この事例は、ヤイ運河町である。町の中心には、寺院やモスクが位置しており、広場も併設されている。

④水上マーケットのように小規模なコミュニティを中心とした空間構築を基本とする事例：アンバワーの水上マーケット、ダムシナ・サドゥアクの水上マーケット

この事例は、アンバワーの水上マーケットである。水上マーケットは、水辺で開催される市場であり、水上で交易が行われている。

図表を示す

- ヤイ運河町、モスクのある町、寺院のある町、ショッピングモールと商務街
- ロップリーのガッチャんち
- アンバワーの水上マーケット、ダムシナ・サドゥアクの水上マーケット
との対応によって人間軸としては小規模コミュニティの位置づけで、中間値となっている。

⑤大規模な敷地で大量の人数を集めている事例：パーク・クローン市場、チャットチャック・ウィークエンドマーケット、ダムヌン・サチャックの水上マーケット
この2事例は大規模に集客をしている知名度の高いマーケットとして位置づけている。

⑥広場が核となってコミュニティ空間ができている事例：象の船着場と広場
今回の調査事例の中でただ一ついわゆる広場として機能している対象である。船着場が核となる施設であるそれに商店街が結びついて良好な人々のコミュニティ空間となっている。

以上14事例を歩行者空間の概念規定モデルに位置づけることによって6つの類型に分けることができた。もちろん歩行者空間の概念規定モデルは9個の類型が基本であるが、中心の構成や、類型の組み合わせによって実際には複合的な類型を読み取っていくことが必要となる。その意味では今回の調査のまとめとしてあたって歩行者空間の概念規定モデルが有効性を持っていたといえるのではないだろうか。

（6）おわりに

洋の東西を問わず、人々は水のあるところを居住地として、都市を築いてきた。バンコクもそのひとつであり、東南アジアを代表する水辺の都市のひとつである。日本を含む世界各都市において、水辺の空間が良質な歩行者空間となっている事例は多数存在し、またそうした計画も多数見受けられる。歩行者空間の構成要素として水辺の環境を整理することは必須である。その意味で今回の調査とその報告は、意味あるものである。またこれらの地域は水と関連する空間だけでなく、多様な歩行者空間を内包する地域でもあった。それらの空間特性については、今後も他の地域の事例と合わせて整理・検討していきたい。

今回、歩行者空間の概念規定モデルの表現力が、本調査報告で確かめられたことは大きな成果といえるであろう。

参考文献
1. Thailand: Nature & Wonders, Maria Grazia Casella, Asia Books, 2004
2. DK Eyewitness Travel Guides: Thailand, Rosalyn Thiro 他, DK Ltd., 2006
10. 水辺から都市を読む 舟運で栄えた港町, 陣内秀信/岡本哲志, 法政大学出版局, 2002
11. アジアの水辺空間～くらし・集落・住居・文化、中村茂樹/町田昭雄/石田卓夫, 鹿島出版会, 1999
12. アジアの都市と建築 29 exotic asian cities, 加藤信三 他, 鹿島出版会, 1986
13. アジア遊学 No.80（特集）アジアの都市住宅, 須村雅彦 他, 丸善出版, 2005
14. タイの住まい, 田中麻里, 園津喜屋, 2006
15. タイの屋形は日本の歴史出版局, 2002
16. タイの屋形は日本の歴史出版局, 2002
17. ロンリーライア・の自由旅行ガイド タイ, サティア・ファクトリー, 2003
18. 地球の歩き方 D17 タイ, 地球の歩き方編集部, ダイヤモンド・ビッグ社, 2006
19. いい旅・街歩き⑲ タイ, いい旅・街歩き編集部, 番英堂出版, 2006
20. 新・個人旅行 タイ アンコール・ワット, アジアネットワーケ, 昭文社, 2006
21. わるぶ情報版 A9 タイ, 小川由美子, JTBパブリッシング, 2007
22. 異国．バンコク歴史散步, 友栄孝, 朝倉書房新社, 1994
22. 建築探訪10 都市に住む知恵——バンコクのショップハウス、
安藤亜哉、丸善、1993
23. アジア遊学 No. 57（特集）バンコク―国際化の中の劇場都市、
小野澤正喜他、勉誠出版、2003
24. 地球の歩き方 D18 バンコク、地球の歩き方編集室、ダイヤモンド・ビッグ社、2006
25. 地球の歩き方ポケット（9）バンコク、地球の歩き方編集室、
ダイヤモンド・ビッグ社、2006
26. オーバルストーリー 16 バンコク、昭文社、2007
27. 歩くバンコク A-1-0001 バンコク在住37人のとっておき
全282店、メディアボルタ、2006
28. クルグ・フィ・アユタヤ、チャイワット ウォラチェットウェラワット、2004
29. オーバルストーリー、チュムボン・アッパーターノン
30. エメラルド仏寺院の歴史、スップトラディット ディスカン、
タイ国宮内庁
31. チャオプラヤー川流域の都市と住宅、法政大学大学院 エコ
地域デザイン研究所 歴史プロジェクト アジアまち居住研究
会、2005
32. 舟運を通じて都市の水の文化を探る、法政大学環境保全研究
室／岡本哲治都市建築研究所、2000
33. グローバルワイド 最新世界史図書、第一学習社編集部、第一学習社、1999
34. 世界大百科事典、日立デジタル平凡社、1998
2007/6/22
37. バンコク・トンプリーにおける水辺空間の形成過程に関する
研究、潮上大輔、法政大学大学院工学研究科建設工学専攻修士論文、2001
38. イスラーム地域としての中国とタイ（2）ータイにおけるムスリムの歴史ー、木村正人・松本光太郎、東京経済大学経済
コミュニケーション科学第22号、2005
39. 歩行者空間の類型化ーアジア諸都市をケーススタディとしてー、
金子友美・芦川智、昭和女子大学大学院生活環境研究科紀要
Vol.17, 2008
40. 麗江（中国）、九仏（台湾）、伊香保（日本）等の歩行者空
間—アジアの歩行者空間に関する研究（その1）ー、芦川智・
金子友美・鷲田佳子・高木亜紀子、昭和女子大学学苑793号、
2006
41. 階段とその空間特性ーアジアの歩行者空間に関する研究（そ
の2）ー、芦川智・金子友美・鷲田佳子・高木亜紀子・池
2名、昭和女子大学学苑801号、2007

（かねこ ともみ 生活環境学科）
（あしかわ さとる 生活環境学科）
（つるた よしふ 生活環境学科）
（たかぎ あきこ 生活環境学科）